

地域社会の一員としての自覚を養う小学校社会科授業の探究 —地域教材の活用を手だてとして—

U17C209F 星 雄馬

過疎化や高齢化といった地域の荒廃が叫ばれている昨今、地域に対する思いを高めるためにどのような社会科教育が求められているのかについて探究した。

I 地域教材活用の意義

地域への思いを高める児童の育成を主眼に置いた際、その第一歩として地域教材の活用があげられると考えた。

地域教材の活用に関して、先行研究(朝倉、1989; 間宮、2016)などを検討した結果、「地域教材の活用を行うことで、地域に対する思いを高めることができること」「地域教材の活用を行うことで、社会事象をより深く、納得・実感を伴って理解できること」という二つが見えてきた。

また、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編においては地域への思いを高める姿に該当する言葉として「地域社会の一員としての自覚」というものがある。

「地域社会の一員としての自覚」と「地域への思いを高める、社会事象をより深く理解できること」という二つの研究の成果から、「小学校の社会科授業の中で、教科書の事例よりも身近な地域の事例を教材として授業内で活用することにより、地域社会の一員としての自覚が養われるのではないか」という探究課題Iを作成した。

II 地域社会の一員としての自覚を養うことを目指した授業実践

探究課題Iの検証を行うために新潟市内のA小学校第4学年で「水はどこから」という水道の仕組みについて学習する単元を実践した。普段何気なく使用している水がどこからどのように運ばれているのか、そして使った水はどこへ向かうのかをとらえる

ことを目標とし、自分の生活と水道事業とを関連付けようと考えた。

実践では、学校がある地域までこの浄水場や配水場を通して水が来ているのかをとらえたり、学校がある地域は水道が整う前どのような生活をしているのかを図1からとらえたりした。そうすることで、水道事業をより身近に感じ、自分の生活とどのように関連づくのかをとらえられると想定した。

このようにして水道事業をとらえた結果、単元終末で水を無駄にしない取組をほぼすべての児童が記入することができた。

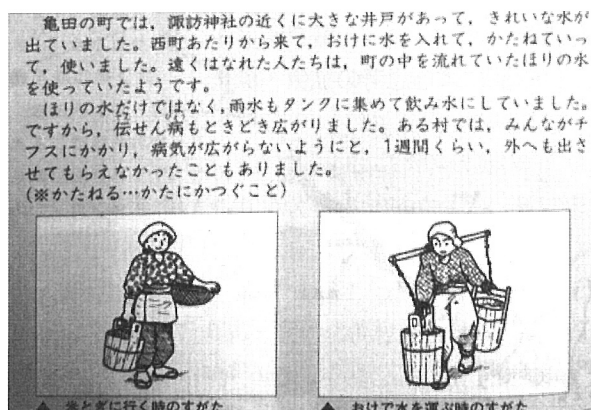


図1 水道ができる前の暮らし

しかし、今回の実践では地域社会の一員としての自覚についての考察が足りず、水を無駄にしない取組を考えた子の中でも評価をすることが難しかった。

そこで、江口(2002)の「小学校から中学校初期に関しては、子どもが『自分が何者であるのか』を考えられるようにし、それ以後に関しては「自分が何者になりたいのか」を考えられるようにする必要がある」という論に基づき、地域社会の一員としての自覚について考察した。江口の論に基づくと

小学校社会科は、基本的には自分を支えているものをとらえるが、単元によってはこれからの自分ないし社会のあり方について考えることも必要になるということがわかった。また、現行学習指導要領と新学習指導要領の二つの学習指導要領からは、地域社会の一員としての自覚について「①地域社会の一員であるという自覚」と「②これからの地域の発展のためにともに努力し協力しようとする意識」という二つに分類できることがわかった。

江口の論は地域に限定せず、社会科系教科の中でどのように社会参画力を高めていくのかを示したカリキュラム論であるが、これを学習指導要領の記述と関連付けて地域社会の一員としての自覚に具体を考えた。①の「地域社会の一員であるという自覚」について、地域にある社会事象が自分の生活を支えているととらえることと同義であると考えた。また、②の「これからの地域の発展のためにともに努力し協力しようとする意識」はこれからの自分ないし社会のあり方に参画するものであるととらえた。以上の二つから地域社会の一員としての自覚の具体例として「地域によって育まれている感覚（以下育まれ感）」と「地域に対する参画意欲（以下参画意欲）」の二つがあると想定した。

それに基づいて、「教科書よりも身近な地域を教材として活用することで、学習者が地域から育まれているという感覚や、地域に対して参画したいという意欲を養うことができるのではないか。」という探究課題Ⅱを作成した。なお、育まれ感と参画意欲のどちらを求めるかは単元の特質によるのではないかと想定した。

Ⅲ 育まれ感の醸成を目指した授業実践

探究課題Ⅱの検証のために、Iと同じクラスで「郷土の発展に尽くした人々」という単元の実践を行った。

実践を行ったA小学校がある地域は低地であることから、古来より溜水や洪水によって苦しめられてきた地域である。現在は排水が進み、工場や大型商業施設が立ち並ぶ地域であるため、子どもはこうした苦勞をとらえることができていない。こうした子どもが、先人たちの苦勞と自分の生活とを関連付けてとらえたり、先人たちの苦勞を共感的にとらえたりできることを期待した。こうした「生活との関連付け」と「共感」を育まれ感であるととらえ、本実

践では、その醸成をねらった。

その実現のために子どもにとって身近な学校付近の現在の様子と、70年以上前の様子を比較できる資料(図2、3)や「昔の苦勞や努力を理解できるような資料」を提示した。

図2は学校の近くにある神社の現在の写真である。この神社は低学年の校外学習で用いられるなど、子どもにとって非常に身近な神社である。一方図3は同じ神社が大正期の洪水により浸水した写真である。子どもにとって知っている神社が水浸しになっているというのは驚きが大きく、その後の学習意欲が継続した。



図2 現在の神社



図3 洪水時の神社

また「昔の人の苦勞がわかる資料」として、腰まで水に浸かって農作業をしている写真や、人工的に河川の河道を変えたことがわかる資料を提示し、「昔の人はすごく大変なことを長い間行っていた」ととらえさせた。

これにより、単元の終末で記入した振り返り記述の「感想」や「学びを受けて考えが変わったこと」などの記述において、96%の児童が「昔の人の苦勞と自分の生活と関連付けること」と「昔の人の苦勞に共感すること」のいずれかを振り返りの中で記述

することができた。また、その双方を記述していた子の中の数名は「これからの地域をもっとよくしていきたい」という参画意欲につながるような記述もしていた。

この結果から、育まれ感と参画意欲の関係性について、「授業の中で育まれ感を十分に感じた子の中には参画意欲の芽生えが見とれる可能性がある」ということもわかってきた。

IV 参画意欲の醸成を目指した授業実践

次に、参画意欲の醸成をねらった授業を検証するため、新潟市内の B 小学校で授業実践を行った。A 小学校が昔ながらの住宅地にあり、近隣に農地があったり祭りなどの伝統文化が息づいていたりしていたことと比較すると、地域のつながりが薄いということが出来る。この学校の第 5 学年の 2 クラス（い組、ろ組）をお借りして「食料生産を支える人々」の実践を行うこととなった。

B 小学校がある地域は住宅地や工業地帯が非常に多く、子どもにとって食料生産は身近ではない。このような子どもに対して、「食料生産についての問題をとらえ、その解決のために努力しようとしていること」「食料生産の概要やそれを支える人々の工夫や努力を自分の生活と関連付けて理解していること」という二つを目標として単元を作成した。この場合、「解決のために努力すること」は参画意欲に、「工夫や努力を自分の生活と関連付けること」は育まれ感に該当すると定義した。本実践では特に参画意欲を求めることとし、「食料生産についての問題をとらえ、その解決のために努力しようとしている」という姿を A 評価として設定し、単元前後の質問紙調査や単元終末の振り返りの記述において「現在、地域のために取り組んでいることは何か」や「学習を通しての感想」などを記入させ評価しようと考えた。

このように育まれ感や参画意欲を高めるために、導入として身近なスーパーの写真を提示した。校区にある大型スーパーの写真であり、身近なものであるから自分の生活と関連付けることが出来るのではないかと考えた。身近に感じることには有効であったが、食料生産と自分の生活との関連付けをとらえるには課題が残った。そこで、同じ区にある農地の航空写真を 2010 年ごろと 1950 年ごろの二つを提示したり、新潟市の食料生産の課題をとらえ、その解決のためにできることを考えたりした。写真では、

1950 年ごろには細かく様々な方向の田が、2010 年ごろには広く平行になっていることがわかる。田の形が変更していることをとらえることで、生産性の向上のための取組を、自分の生活と関連づけてとらえることが出来るのではないかと考えた。また、新潟市の食料生産の課題を解決するための人々の工夫を考えることで、一人一人が自分にできる取組はなにかを考えるようになるかと考えた。

結果として、A 評価に至ったものは、い組 6.25%、ろ組 6.45% という結果になり、A 評価に到達した児童は少なかった。

この結果から、育まれている感覚が養われていないと参画意欲を高めることは難しいことがわかった。今回の実践では地域にある写真などの資料を提示し、育まれ感を醸成しようとした。しかし、単に資料を提示するだけでは自分の生活と関連付けてとらえたり共感したりすることが難しく、育まれ感を醸成することは難しかった。そのため、「新潟市のためにできることを考える」という参画意欲の高まりをねらった活動を取り入れても、意欲が高まらず、結果として A 評価の児童が少なくなってしまったと考察した。そこで、身近にとらえられる地域教材が少なく、学習内容と自分の地域とが関連付きにくい場合、「学習したことが地域にどのように生きていると思う？」というような発問を行って地域から学習内容をとらえる視点を与えたり、共感を生むために地域の人々の思いや行為に着目してとらえさせたりすることが必要だと考えた。

それをもとにして、「社会事象の学習において、地域や自分との関連を問う発問を行ったり、地域における社会事象を支える人々の思いや行為に着目してとらえたりすることで、地域社会の一員としての自覚が養われ、地域によって育まれている感覚や地域に対しての参画意欲などを養うことが出来るのではないか」という探究課題Ⅲを設定した。また、前実践と本実践の二つの実践から、育まれ感と参画意欲の関係性について、育まれ感が高まることによって参画意欲が芽生えるという関係性があることもわかってきた。

V 社会事象と地域との関連性のとらえを目指した授業実践

探究課題Ⅲの検証を行うために、同じ B 小学校い組、ろ組の二クラスで実践を行った。この実践では

私たちの生活に中小工場が果たす役割について理解することを目標とした。B 小学校が立地する区は市内でも有数の工場地帯であり、子どもにとって工場は身近な存在である。身近な工場を活用した授業実践を想定し、A 評価「自分の生活と中小工場との関連を工業生産に携わる人々の工夫や努力と関連付けて理解していること」、B 評価「『中小工場が自分たちの生活の向上に役立っていることをとらえていること』、『中小工場で働く人々の工夫や努力に共感すること』のいずれか」と想定した。なお、どの姿も育まれ感に該当するものであると考えた。

実践では第1時に東大阪市や東京都大田区といった中小工場の働きと生活に果たす役割をとらえ、第2時で新潟市東区の中小工場の事例を扱った。この時、東京都大田区や東大阪市でみられる中小工場の働きが自分たちの地域の中小工場でも見られることをとらえる姿を期待した。



図4 授業で活用した東区にある中小工場の製品

単元を通じた実践ではなかったため、単元前後の比較はできなかったため、今回は授業後の振り返りの記述において、自分の生活とのつながりを記述させるなどして達成状況を評価した。結果的に、A 評価 (い組 33.3%、ろ組 20.8%)、B 評価 (い組 53.3%、ろ組 58.3%)、C 評価 (い組 13.3%、ろ組 20.8%) となり、ほとんどの児童が授業のねらいを達成することができたという結果となった。記述からは、「中小工場は人々のために難しいことにも挑戦していることがとってもすごいと考えが変わりました。」や「いろんな協力で作り上げている、文具やいろんな機具を普通に使ってもらえることに感謝して大切に使いたいです。」などの記述がみられ、身近な地域の工場

を紹介し、そこで働く人々の思いや努力についてとらえたことで、自分の生活と関連付けたり共感したりすることができたと考えた。

VI 研究のまとめ

以上5章にわたって地域社会の一員としての自覚を養うために小学校社会科の中でどのような授業実践が可能なのか探究してきた。探究の中で見えてきたことをまとめると、「地域や自分との関連を問う発問を行ったり、社会事象を支える人々の思いや行為に着目してとらえたりすることで地域によって育まれている感覚や地域に対する参画意欲が醸成される。なおその二つには、育まれ感の高まりによって参画意欲が芽生えるという関係性があり、小学校段階では育まれ感の醸成に焦点を当てて学習することが有効である。」ということができる。

実践の中には参画意欲の高まりを求めた授業実践もあった。実践を通して参画意欲を高めることのみを目標としても、地域によって育まれている感覚がなければ参画意欲を高めることは難しいことがわかった。そこで、授業の中で、自分の地域と学習内容との関連付けを行ったり、地域から学習内容をとらえたり、人々の思いや行為などに着目して社会事象をとらえたりすることを重視する必要性に気付いた。それらを行うことで、「自分は地域によって育まれているんだ」という感覚を持つことにつながり、それが「地域に対して参画しよう」という意欲につながり、地域社会の一員としての自覚を養うことにつながるとわかった。

育まれ感や参画意欲、そして活用できる地域教材は単元や地域によって千差万別である。今後どのような地域教材をどのように活用することで育まれ感や参画意欲を高めることができるのかを探究し続けていきたい。

【引用文献】

- ・亀田町教育委員会『私たちの亀田町』平成16(2004)年
- ・亀田町『写真は語る 亀田の百年』平成2(1990)年
- ・https://needs-inc.co.jp/?page_id=123